

訴が少なく、術後の QOL の向上に有用であった。リンパ節転移程度からすると、大網温存術はA領域の早期胃癌には適応できるがM領域の早期胃癌に対してはさらに検討を要する。

## 28) 2群リンパ節転移を伴った大腸腺腫内癌の1例

角南 栄二・伊賀 芳朗 (厚生連村上総合病院外科)  
村山 裕一・清水 春夫  
岡田 貴幸・飯合 恒夫 (新潟大学第一外科)

今回我々は2群リンパ節転移を伴った大腸腺腫内癌の1例を経験したので報告する。症例は67歳男性。大腸癌検診で異常を指摘され注腸及び大腸内視鏡検査にて盲腸にI型進行癌、S状結腸にφ6mmのIIa癌、上部直腸にφ3mmのIIa癌を各々認めた。S状結腸及び上部直腸の腫瘍は内視鏡的に切除し、病理組織学的にいずれも腺腫内癌であった。後日盲腸I型進行癌に対し3群リンパ節郭清を伴う右半結腸切除術を施行した際、触診にて直腸傍及び下腸間膜動脈リンパ節の腫脹硬化を認めたため、3群リンパ節郭清を伴う低位前方切除術を付加した。病理組織学的にも2群リンパ節の転移陽性を認めた。盲腸I型進行癌は深達度ssで、所属リンパ節に転移を認めなかった。

## 29) 新潟県における高齢者胃癌の現状

佐々木 壽英・佐野 宗明  
梨本 篤・筒井 光廣  
土屋 喜昭・牧野 春彦 (新潟県立がんセンター外科)  
田中 乙雄

昭和47年から平成2年まで19年間にわたって、新潟県の胃癌手術例調査を行ってきた。この間、県内症例として30,378例の登録数を数え、98%という高い登録率が得られた。ご協力に心から感謝する。胃癌手術例は昭和47年の1,273例から昭和61年の2,590例まで増加し、以後横這いである。本調査の最終報告として、胃癌の高危険群である高齢者胃癌の現状について述べる。手術例の増加が最も著しいのは70歳代であり、平成2年には675例を数え、昭和47年の4倍以上に増加した。70歳代の早期胃癌率、切除率の推移などについて述べ、今後の高齢者胃癌対策について検討を加える。

平成3年から新潟県の地域がん登録が開始されたため、この胃癌手術例調査は地域がん登録に移行することとした。地域がん登録における胃癌手術例登録数は平成3年

1,473例、4年1,659例である。胃癌手術例で約800例から1,000例の未登録症例があるものと推定される。地域がん登録へのご協力をお願いする。

## 30) 带状疱疹合併消化器癌の検討

星山 圭鉉 (柏崎中央病院外科)  
星山 真理 (同 内科)  
武藤 一朗・鈴木 茂 (新潟大学第一外科)

带状疱疹の発症は細胞性免疫機能の低下がウイルス(Uaricella Zoster Virus)の再活動の原因となっていると考えられ、しばしば内臓の悪性腫瘍を合併すると報告されている。最近では抗ウイルス剤、ソリブジンとフルオロウラシル系抗癌剤の併用による副作用で死亡例が報告され、社会問題となったことはよく知られたことである。

われわれは過去10年間に带状疱疹を合併した消化器悪性腫瘍症例を検討したので報告する。10年間の带状疱疹例は約230例あり、うち消化器疾患は胃癌5例、大腸癌2例、胆石症2例である。带状疱疹と胃癌の並存率は2.2%、大腸癌は0.9%、また胃癌の带状疱疹合併症は3.3%、大腸癌は1.5%であった。これらの症例につき、種々検討を加えたので報告する。

## 31) 気圧と虫垂炎

福田 稔・大竹 雅広 (県立坂町病院外科)

平成4年2月より平成6年2月迄に112例の虫垂炎を経験した。これら症例について、気圧と虫垂炎発生の関係を調査した結果について報告する。

## 32) 当院赴任後5年間における手術例の検討 —手術成績を中心に—

川口 英弘・三間智恵子 (巻町国民健康保険病院外科)

過去5年間に当院で経験した入院手術例は834例であり、その内訳(一部重複)は胃癌144例、大腸癌94例、肝・胆・膵腫瘍40例、乳癌24例、甲状腺癌5例、胆石症(胆管結石症、肝内結石症を含む)130例、急性虫垂炎84例、鼠径ヘルニア128例、痔疾患66例、イレウス19例、胃潰瘍12例、大腿ヘルニア11例、その他93例である。胃癌全症例の5生率は67%で、70歳未満では80%であるのに対し、70歳以上では55%と成績不良であった(p=